

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名 武田 淳
学位の種類 博士(学術)
学位記番号 環情博甲第385号
学位授与年月日 平成 年 月 日
学位授与の根拠 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び
横浜国立大学学位規則第5条第1項

学府・専攻名 環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻

学位論文題目 権力化する「環境」と地域社会の戦略的順応—コスタリカ自然保護区制度の構造と実際—

論文審査委員 主査 横浜国立大学 教授 及川敬貴
横浜国立大学 教授 松田裕之
横浜国立大学 教授 小池文人
横浜国立大学 教授 加藤峰夫
横浜国立大学 教授 藤掛洋子

論文及び審査結果の要旨

経済発展への欲求の強い開発途上国で、なぜ環境政策が進展していくのか。近年の社会学や政治学の文献では、「環境」が保護や収奪等の対象であるだけではなく、中央政府による国内統治のためのパワー(権力)としても活用されているからである、という説明(「環境統治性(論)」)がみられるようになった。自然保護区制度を通じての資源の囲い込みや地域住民の強制退去等が典型例である。しかし、申請者の学位論文は、環境先進国として知られるコスタリカを対象として、その自然保護区制度の構造と実態を詳細に分析し、環境統治なるもの実像が、これまで考えられていたよりも多様かつ複雑なものであることを明らかにした。同論文の概要は次のとおりである。

第1章では、問題の所在や本論文の目的等を示すとともに、中央政府が統治主体となる「上からの環境統治性」と地域社会が中央政府の統治客体を越えた存在となる「下からの環境統治」という分析視角を提示している。第2、3章では、制度構造の把握に取り組んだ。具体的には、コスタリカの自然保護区政策の発展過程と管理組織体制に係る考察を行ったものである。こうした構造的な知見を踏まえ、第4、5章では、制度運用の実態の考察を行っている。申請者は、現地調査の対象となったオスティオナル保護区に通算で100日程度滞在し、膨大なヒアリング資料を渉猟し、それを基にして同保護区における地域資源管理の実態を活写した。そして終章において、総括を行っている。

第2・3章での考察を通じて、コスタリカの自然保護区政策と関連する行政組織改革が、欧米を中心とする自然科学者たちがもたらした「環境保全」という知とIMF等の国際組織等からの外圧が組み合わさったところ生まれた、中央政府のイニシアティブであることが確認された。また、世界初の生物多様性法(Biodiversity Act)を始めとする、さまざまな環境法令の概要と国家地域保全庁なる管理組織の構造に関する基礎的な情報が得られた。こうした知見は、既存の環境統治性の理論的枠組を相対化するわけではないが、わが国では初めてまとまった形で提供されるものである。生態系サービスへの支払制度の展開や上述の生物多様性法の制定等、近年、環境国家としてのコスタリカの環境法政策は注目されているが、同国を比較法制度研究の対象とする法学者は少ない。邦語での本格的な研究成果となると、ほとんど見当たらないのが実状である。そのため、本論文の第2・3章の考察結果は、とくに比較環境法や環境政策史の観点から大きな意義を有する。

第4・5章は、本研究の学術的特色が最もよく現れている。この部分では、ウミガメの産卵地として世界的に名高い浜辺を含んだ、オスティオナル保護区における資源管理の実態が詳しく考察されている。膨大なヒアリング資料に基づく考察の結果、この保護区は、環境保全の名の下に、地域の治安維持や福祉の向上を図るといふねらいをもって、オスティオナル村の人々が誘致をしたものであることがわかった。そして、住民たちは現在も保護区制度を維持し、自主的な資源管理を続けているという。こうしたことから、地域社会は国の環境政策（ここでは、保護区政策）における統治客体としてのみ存在しているだけではなく、むしろ国の政策を巧みに利用して、自らの資源管理パワーを増大させている等の状況が浮かび上がってきた。このことは、中央政府による「上からの環境統治」とは異なる「下からの環境統治」が多様な形態で進行していることを窺わせるものである。

本論文は、わが国で注目されながらも、いまだに情報が少ない、コスタリカ環境法制に関する基礎的な知見をまとめた形で提供し、その自然保護区制度が「上からの環境統治」的な性格を備えている仕組みであることを描き出すとともに、オスティオナルという特定地域に関してではあるとはいえ、地域社会における、「下からの環境統治」の構造と実態に関する総合的な知見を初めて提供したものである。そして終章において、環境統治なるものの多様性と、多様な環境統治間の関係性の考察が重要であることを明確に指摘してみせた。このように、本論文は、中央政府による「上からの環境統治」に焦点を絞りがちであった既存研究に対し、「上から」と「下から」の環境統治の関係性という魅力的な、かつ、多様な学問領域の専門家が共有し得る見込みが高い、新論点を提示したという意味で学術的な貢献度が高いものといえる。以上から、本論文は博士（学術）の学位論文として十分な内容を有すると審査委員全員が一致して認めた。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。